

論文の内容の要旨

氏名：三井 梨紗子

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題名：評定競技のエキスパートコーチにおける実践知の構造に関する研究

：アーティスティックスイミング競技のコーチングに着目して

スポーツコーチにとって、選手の競技力を向上させるための支援を行うことは重要な役割である。ただしコーチング実践は、選手とコーチのみならず練習環境や場の状況といった様々な要因が関わりあう、動的で相互依存的な極めて複雑なものである。とりわけアーティスティックスイミング（AS）などの評定競技は、選手の動きに対する成績評価が審判の主観的な見方あるいは見え方に少なからず影響を受けるため、客観的な評価が難しい。そのような状況の中でも、自らの経験や知識をもとに適切な意思決定を選択し、長年にわたって世界トップレベルのハイパフォーマンスアスリートを育成し続けているコーチが存在する。そのエキスパートコーチは、特定の競技状況における多様なコーチングの現場で培ってきた実践知を有している。本研究は、評定競技のエキスパートコーチにおける実践知の構造を質的分析により、多角的な視点から明らかにすることを目的とした。

第1章では、まず研究の背景として、スポーツコーチングの現状と課題および評定競技の特性、AS競技の特徴とコーチングの課題を提起した。次に、エキスパートコーチの専門知識、実践知、評定競技における先行研究を概観し、それぞれの関連を含めた研究動向を示した。その中でエキスパートコーチに関する研究では、1990年代まで、エキスパートコーチのコーチングスキルや知識を特定して定義づけることに焦点が当てられ、2000年代からはエキスパートに至る成長過程や学習プロセスに発展したことを示した。また、国内におけるスポーツコーチング領域の実践知研究においては、個別実践事例の開示・蓄積から実践知の創造を経て一般理論の構築と方法論確立を目指す方向性が期待されているものの、一般理論を示すほどの事例と知見が集まっていない現状を示した。そのため、教育学における授業研究で先進する教師の実践知研究を参考に、コーチング学研究におけるエキスパートコーチの実践知の定義を操作的に行い、実践知研究における本研究の位置づけを示した。さらに、評定競技に関する研究では、これまで競技特性に対応して獲得した選手の技術や、これを支える身体的・心理的スキルといった量的分析による研究知見としてコーチングの場に提示されてきた。そのため、評定競技に関する研究は、選手に焦点を当てた研究が主として行われており、コーチおよび両者の関係に着目した研究があまり行われていない現状が明らかになった。よって、評定競技のコーチングに関してコーチに着目した研究が途に就いた段階では、まず選手育成に実績をもつAS競技のエキスパートコーチの実践知を探索することが、今後の研究のための基礎を築くうえで有効と考えられる。これらの研究動向と課題および期待される研究の方向性を踏まえ、本研究の目的「AS競技におけるエキスパートコーチの実践知の構造を明らかにする」と意義を提示し、これを達成するために①経験に基づく「コーチング理念」の形成過程を記述解釈し、②指導に関わる指導意図、指導の価値および指導の視点を踏まえた「指導観」を視覚化し、③「コーチング行動」に内在している実践知の構造を明らかにする3つの研究課題を設定した。

第2章では、AS競技におけるエキスパートコーチの語りから、経験に基づく「コーチング理念」の形成過程を記述解釈し、その理念に根づくコーチング方略を開示することで実践知の形成について検討した。その結果、エキスパートコーチは、長期にわたるコーチング経験の中で起きた様々な契機から、日本代表コーチとしての活力、意志、方向性ととともに、自らが指導できる限界を受け入れること、そして、評定競技の特性を踏まえた多角的な視点の必要性を認識することといったコーチング理念の形成を示した。なぜなら、コーチの想定を超越する領域に自らの力で切り拓いていくことのできる選手こそが、人を感動させる演技を表現できるというコーチング理念に根ざしていることが推測された。

第3章では、AS競技におけるエキスパートコーチのコーチング実践に関する発話データをSCAT法による分析を行い、指導に関わる指導意図、指導の価値および指導の視点を踏まえた「指導観」について検討した。その結果、エキスパートコーチは、伝わらないことを前提に指導を捉える「コーチとしての基盤

を持つ」、評定競技とチームスポーツの特性を兼ね備えている AS 競技の本質を踏まえた「選手の学びの態勢をつくる」、自身の指導を選手の視点で理解し、学びの仕掛けをつくることで「学びを具現化する」といった「指導観」を有していることが明らかになった。

第 4 章では、AS 競技におけるエキスパートコーチのコーチング現場の継続的な参与観察を通して、場の状況や様々な文脈に修飾された選手とコーチの相互作用を記述解釈することで、コーチの「コーチング行動」に内在している実践知の構造を検討した。その結果、エキスパートコーチはコーチと選手の信頼関係だけではなく、「文脈や背景に即した対人関係」を踏まえてコーチングの場を作りあげていた。そして、「言語化の困難性に基づく状況との対話」を実践していることを示した。その上で、これらの要素が効果的に構造化するための「意図的な場」を作りあげ、それを積極的に操作することで自ら切り拓く選手の育成を目指していることが明らかになった。

第 5 章では総合考察として、3つの研究課題で明らかになった「コーチング理念」、「指導観」、「コーチング行動」を整理した。さらにこれらの相互関係を推定することで、3つの要素に通底する実践知を読み解き、その構造化を試みた。その結果、コーチングの方向性を与えるコーチの信念や原理といった「コーチング理念」は、「コーチの想定を超越する領域に自らの力で切り拓いていくことのできる選手」を原点に、これを「指導観」と「コーチング行動」に繋ぐ「多角的な視点の必要性」と「指導の限界を受け入れる」が形成されていることを示した。そして、これらの確固たる理念が形成されたことで、コーチングにおける「指導観」として意図や視点が明確になり、「コーチとしての基盤をもつ」、「選手の学びの態勢をつくる」、「学びを具現化する」という3つの「指導観」を意味づける以下のような具体的なコーチング行動が選択されることを示した。すなわち、エキスパートコーチは「指導の限界を受け入れる」ことと評定競技の特性を踏まえた「多角的な視点の必要性」を理念とすることで、コーチングにおける指導において、伝わらないを前提に指導をとらえ、自分の指導を振り返り、指導に魅力を感じるといった「コーチとしての基盤をもつ」ことになる。そして、これらの基盤は、「コーチの想定を超越する領域に自らの力で切り拓いていくことのできる選手」の育成のために必要な動きを把握し、動きの原点を知り、他者の視点を取り入れるという「学びを具現化」することを支えている。学びが具現化されることで具体的なコーチング行動として、「選手間の対人関係を踏まえた文脈の把握」と「言語化の困難性に基づく状況との対話」を踏まえた「意図的な場」が作り上げられ、その過程を促進することに、選手の視点で学びを理解することや学びの仕掛けをつくることで「選手の学びの態勢をつくる」ことが役立つことなどを明らかにした。

第 6 章では総括として、研究の成果と今後の課題を踏まえたコーチング現場への提言を行った。本研究の分析対象となったコーチ A は、評定競技である AS 競技における世界トップレベルのハイパフォーマンスアスリートの育成という特定の状況に適応したエキスパートであり、極めて稀少および貴重な個別事例といえる。そのエキスパートコーチのコーチング実践そのものを質的に分析して、実践知の構造を詳細に開示することの意義は大きい。今後は、AS 競技に限らず他の評定競技の実践知について検討すること、指導対象の競技レベルや年齢が異なるコーチング経験を持つ実践知も検討していくことで、より包括的、体系的に実践知を捉えることができ、コーチング実践に有益な新たな知見を提供することができると考えられる。